

アラム王はある場所に陣を敷こうとしましたが、預言者エリシャの警告で、イスラエル王はその場所を警戒させました。それが二度、三度と続き、アラム王は怒り、内通を疑いました。家来がそれはエリシャの働きによると伝えると、王は馬と戦車をドタンに送って包囲しました。



### 1. 彼の目を開いて (15～17節)

①町を包囲 (15)「神の人の召使いが、朝早く起きて、外に出ると、なんと、馬と戦車の軍隊がその町を包囲していた。若い者がエリシャに、『ああ、ご主人さま。どうしたら良いのでしょうか。』と言った。」アラム軍は、王の命令で即座にドタンに向かいました。早朝から預言者エリシャの居住する場所を取り囲みます。エリシャの召使いがその様子を発見すると、主人に報告します。大変にあわてている様子です。「大変です。ご主人さま。周りを取り囲まれています。どうすれば良いのでしょうか。」

②恐れるな (16)「すると彼は、『恐れるな。私たちとともにいる者は、彼らとともにいる者よりも多いのだから。』と言った。」エリシャは言います。「恐れるな。なぜなら、私たちには、ここを包囲している軍よりもたくさんの守りがあるからだ」。これは、若い召使いにはよく理解できないことでした。しかし、エリシャの言葉は確信に満ちていました。

③火の馬と戦車 (17)「そして、エリシャは祈って主に願った。『どうぞ、彼の目を開いて、見えるようにして下さい。』主がその若い者の目を開かれたので、彼が見ると、なんと、火の馬と戦車がエリシャを取り巻いて山に満ちていた。」エリシャは主に祈りました。「どうぞ、この若者の目を開いて、見えるようにしてください。」この祈りはただちに聞き届けられて、若者の目は開かれました。そして、彼は見たのです。この町を囲む山には、火の馬、戦車が取り巻いていました。それは、ドタンの町を囲むアラム軍にも増して多かったのです。エリシャの言葉通りでした。

### 2. サマリヤの真ん中に (18～20節)

①民を打ち盲目に (18)「アラムがエリシャに向かって下ってきたとき、彼は主に祈って言った。『どうぞ、この民を打って、盲目にしてください。』そこで主はエリシャのことばのとおり、彼らを打って、盲目にされた。」いよいよアラムの軍がエリシャに攻撃してきます。捕縛か無きものにするか。どちらに目標があるかはわかりません。いずれにせよイスラエルの危機です。エリシャは祈ります。「この民を打って、目が見えないようにしてください」。主はその祈りに応えて下さいました。天の軍勢が用いられたのでありましょう。アラム軍は打たれたのです。加えて、彼らの目は見えなくなったので

す。見える限りでは優勢のアラム側が劣勢なのです。

②サマリヤに (19)「エリシャは彼らに言った。『こちらの道でもない。あちらの町でもない。私について来なさい。あなたがたの捜している人のところへ連れて行ってやろう。』こうして、彼らをサマリヤへ連れて行った。」エリシャはアラム軍の人々に言ったのです。「あなたがたは道を間違えていますよ。こちらの道でもないし、あちらの町でもありません。あなたがたの捜している人がいる所に案内してあげましょう。私についてきなさい。目が見えなくなったアラムの兵達は何が何だかさっぱりわからなかったでしょう。しかし、道案内に従うしかありません。

③目が開かれ (20)「彼らがサマリヤに着くと、エリシャは言った。『主よ。この者たちの目を開いて、見えるようにして下さい。』主が彼らの目を開かれたので、彼らを見ると、なんと、彼らはサマリヤの真ん中に来ていた。」ドタンから南に 20km ほどのところに、サマリヤがあります。イスラエルの中心地です。目の見えないアラムの軍の者達が連れていかれたのは、イスラエル軍が態勢を固めている地です。アラム軍はエリシャを捕らえることを主眼としていましたから、相手の国の強力な軍を相手にすることは考えていませんでした。今、彼らはそのような所に置かれてしまったのです。エリシャは主に願いました。「主よ。この者たちの目を開いて、見えるようにしてください」。目が見えるようになって、びっくり。なにしろいつの間にか彼らは、敵イスラエルの都サマリヤのど真ん中に身を置かれていたのですから。

### 3. イスラエル王の対応 (21~23 節)

①私が打ちましようか (21)「イスラエルの王は彼らを見て、エリシャに言った。『私が打ちましようか。私が打ちましようか。わが父よ。』」目の前のアラムの兵たちを見た、イスラエルの王は言います。「私が彼らを打ち殺しましようか」。二度も言っているところを見ると、王自身の怒りとういよりは、迷いがあつたのではないかと思われます。「わが父よ」と王がエリシャに言っていますが、この時点で、エリシャは王にとっても敬愛される立場にあつたということでしょう。

②パンと水をあてがい (22)「エリシャは言った。『打つてはなりません。あなたは自分の剣と弓でとりこにした者を打ち殺しますか。彼らにパンと水をあてがい、飲み食いをさせて、彼らの主君のもとに行かせなさい。』」すると、エリシャは「打つてはなりません」と応えます。その理由は「剣と弓でとりこにした者を殺しますか」と言っていますが、要するに無抵抗の捕虜に対して手を出すことをなしてはならないということです。エリシャは、むしろ彼らにパンと水を与えて、落ち着いたらアラムの王の許に帰しなさいという、勧めであ

りました。あ

③盛大なもてなし (23)「そこで、王は彼らのために盛大なもてなしをして、彼らに飲み食いをさせて後、彼らを帰した。こうして彼らは自分たちの主君のもとに戻って行った。それからはアラムの略奪隊は、二度とイスラエルの地に侵入して来なかった。」王は素直にこれを聞き入れ、彼らを盛大にもてなし、彼らを国に帰したのでした。そんなことですから、これを境に、アラムの略奪隊が、イスラエルの地に侵入することは二度となかったと結ばれています。

《結論》第一の学びはこれです。つまり、アラムからすれば、ドタンにエリシャが

いることを察知し、そこを包囲したことで、勝利を確信したことでしょう。力関係かれすれば、圧倒的に勝っていたからです。それは、エリシャの召使いも感じていました。周りは敵の軍に囲まれていたのですから、このままならやられてしまいそうです。しかし、エリシャは若者に「恐れるな」と伝えたのです。彼には、自分たちを守る軍が見えていたからです。エリシャは祈ります。すると、若者の目は開かれます。彼も霊の眼が明けられたのです。つまり、後ろのページの絵にもありますように、ドタンの町の背後にある山には、火の馬と戦車を取り巻いて、満ちていたのです。圧倒的劣勢と見るのは、人の眼であり、圧倒的な優勢と見るのは霊の眼でした。エリシャは人の力ではなく、神の力を確信していました。私どもも、劣勢に置かれていたり、否定的な状況にあつたりしても、主は背後にいて、圧倒的勝利者としてくださると信じたいものです。主はあなたと共にいてくださり、困難を越えさせてくださいます。

第二の学びはこれです。つまり、エリシャはアラムの軍の打ち、彼らを盲目にするように祈りました。その通りにアラムの軍の兵たちの目はくらまされ、彼らにとっては敵のイスラエルの真ただ中に、身を置くことになりました。それはサマリヤでした。イスラエルの王は、エリシャにたずねました。「彼らを、私が打ちましようか？」と。その時のエリシャの答えは、「殺してはなりません。捕虜にした者をあなたはころすのですか」というものでした。それどころか、かれらをごちそうでもてなすことを勧めたのです。王は実際にそのようにしました。アラムの兵達は、狐につままれたような気分だったことでしょう。殺されても仕方がないのに、ごちそうを振舞われて、国にも帰らせてくれたのですから。

これはエリシャとうい人間から出た温情でしょうか。いやそれを越えたものです。エリシャにこのような考えを与えられたのは、主なる神以外ではありません。それは主なる神の憐みによるものです。イエス様がこのようなことを教えてくださいました。

「目には目で、歯には歯で」と言われたのを、あなたがたは聞いて

ています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。あなたに一ミリオン行けと強いる者とは、いっしょに二ミリオン行きなさい。」(マタイ 5:38~41)

確かに、人間に隙を見せたら付け込まれる、ということもあります。しかし、悪意はさらなる悪意を生み出すことも確かです。高度な知恵を必要とする場合も多々ありますが、主なる神の愛と憐みをいただいて、私どもの日常でも、人間の計算を越えた何かをさせていただく恵みにあずかりたいものです。御霊なる神が働いてくださる時に、見返りを期待せず、求められること以上のことをする道が備えられるのです。宣教の働きも、知恵の限りを尽くしますが、計算を越えた恵みがあればこそ、事が起こされていく事を私達は教えられています。やはり、イエス様をから学び教えられていきましょう。宣教にも日常生活にも、恵みの働きをさせていただきたいものです。